

病害虫発生特殊報 第1号

富山県農林水産総合技術センター所長

トマト黄化葉巻病の発生について

1 病害虫名：トマト黄化葉巻病

2 病原ウイルス：トマト黄化葉巻ウイルス
(Tomato yellow leaf curl virus ; TYLCV)

3 作物名：トマト

4 発生経過

平成25年1月に、富山県西部の施設トマトにおいて葉脈間の退緑、葉巻、葉身の一部黄化、上位部における小葉化、節間短縮、株の萎縮による生育抑制(叢生)等の異常が認められた。これらウイルス様症状を呈する株、34株から上位葉を採取しPCR法による判定を行ったところ、本県では未発生のトマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)によるトマト黄化葉巻病であることが判明した。

本病は、西日本および関東を中心に36都府県で発生が確認されている。

5 本病の特徴

(1) 病徴

発病初期は新葉が葉縁から黄化しながら葉巻症状となる。症状が進むと葉脈間が黄化し縮葉となる。さらに進行すると、頂部が叢生し株全体が萎縮症状を示す。発病前に着果した果実は正常に発育するが、発病後の花は蕾のまま落下したり、開花しても結実しない場合が多い。育苗期や定植後の生育初期に感染すると被害が大きい。感染後、発病までは25℃で7～20日であるが、低温期には病徴がはつきりせず、3～5か月を要した例もある。

(2) 伝染経路

本病原ウイルスはタバココナジラミのバイオタイプBおよびQによって媒介され、本県でもこの2種の発生が確認されている(平成23年11月18日付け病害虫発生特殊報第1号参照)。幼虫、成虫ともに本ウイルスを獲得でき、感染した植物を吸汁すると約1日の潜伏期間を経た後、伝搬能力を獲得し、死亡するまで伝搬能力を保持する(永続伝搬)。この害虫によく似たオンシツコナジラミは本病を媒介しない。なお、ウイルスの経卵伝染、土壌伝染、種子伝染ならびに管理作業による接触伝染は確認されていない。

(3) 宿主植物

日本で本病の自然発生が確認されているのは、トマト、ミニトマト及びトルコギキョウの3種である。その他、ナス科、キク科、マメ科など8科18種以上の植物で感染が確認されているが、感染しても無病徴である場合が多い。

6 防除対策

1) トマト黄化葉巻ウイルス：TYLCVの防除対策

- (1) 苗を購入する際は、ウイルス罹病株の持ち込みに注意し、健全苗であることを確認する。(トマト苗以外の野菜苗、花苗についても注意する。)
- (2) 発病株は見つけ次第抜取り、ビニール袋に入れて密封し、ウイルス保毒虫の拡散を防ぐ。株が枯れ、虫が死滅してから持出して土中に埋めるなど処分する。

2) タバココナジラミの防除対策

(基本3原則：ハウスに入れない、増やさない、ハウスから出さない)

- (1) 苗を購入する際は、タバココナジラミの寄生がないことを確認する。(トマト苗以外の野菜苗、花苗についても注意する。)
- (2) 全ての開口部に防虫ネット(目合い 0.4 mmが望ましい)を張る。出入口のカーテンは二重にし、開放状態にしない。
- (3) 施設周辺部に光反射マルチを設置し、タバココナジラミ成虫の侵入を防ぐ。
- (4) 施設内外に黄色粘着板や黄色粘着テープを設置してタバココナジラミの発生を観察し、成虫の早期発見と捕殺に努める。
- (5) 育苗期～定植時にタバココナジラミに効果のある粒剤を施用し、定植後も定期的に薬剤防除を実施する。
- (6) 薬剤防除においては、ネオニコチノイド系薬剤の一部やピリプロキシフェン剤に対して感受性の低いタバココナジラミ系統の存在が報告されているので、農薬を使用する際は農林振興センター等に相談の上で実施する。なお、薬剤抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤の連用はしない。
- (7) 生物農薬として、オンシツコナジラミ及びタバココナジラミの天敵であるオンシツツヤコバチ等の製剤が登録されており、化学農薬に頼らない防除法として推奨できる。
- (8) 野良生えトマト及び雑草の処分を徹底する。また、施設内外の雑草は定植の10日前までに除草する。
- (9) 栽培終了時には、株は切断、抜根して完全に枯死させる。残渣をハウスから持ち出した後、施設を密閉して蒸しこむ(40℃、10日以上)。
- (10) 作物残渣及び抜き取った寄主植物等は土中に埋設、ビニール被覆するなど適切に処理する。

問合せ先	農業研究所 病理昆虫課
TEL 076-429-5249	FAX 076-429-7974